

第二回 平成二十八（二〇一六）年五月二十一日

## 九〇十世紀の敦煌地域社会

山口 正晃（やまぐち・まさてる）

ただいま、ご紹介にあずかりました山口と申します。この大手前大学で、東洋史を担当しております。今日、お話する内容は、「九〇十世紀の敦煌地域社会」ということで、この公開講座のラインナップを見ていると、明らかに私だけ浮いているんですね。時代も、地域も、他の人たちと全然違うので、時代は一千年以上前で、地域も日本じゃなくて中国の辺境のほうで、というのは私の専門が中国史なので、必然的にそうならざるを得ないんです。ただ、そうやって見てみますと、逆に、この公開講座のラインナップのなかで、バリエーションの幅が広がると言えますか、そういうことなのかなと思います。まあ、とりとめの話なので、お気楽に聞いていただけたらうれしいです。

敦煌をご存知の方が多いと思います。たぶん、ほとんどの方はご存知じゃないかと思うんですけども。あるいは、今は、観光地としても有名になっておりますので、行ったことのある方もおられるかもしれませんね。そういうことで、今日は一千年前の敦煌について、お話をしていきたいと思います。

今日、お話する内容をあらかじめざっとご説明申し上げますと、前半はまず、敦煌とはそもそもどう

いうところなのかと。敦煌の地理的な環境、あるいは歴史的な背景、それから、今からおよそ百年ほど前に、いわゆる敦煌文献、敦煌写本と呼ばれる一大写本群が見つかったんですが、その敦煌文献に関する予備知識と言いますか、これを前半を使ってお話したいと思います。後半、あくまでもこの大手前大学の今年度の公開講座のテーマが「ひと まち くらしく地域再考」ということで、敦煌というその町で、千年ほど前に暮らしていた人々、一般庶民の暮らしの様子について、そのほんの一端ではありますが、ちよつとこの敦煌文献を使つて見ていきたいと。一つは社と呼ばれるもの、もう一つは、仏教信仰の一面面ということで、本当にごく簡単に触れる程度ですけども、ご紹介したいと思います。

まず、地理的な環境から見ていききたいと思います。これは、中国の省境を示した地図ですね（図1）。敦煌は、この細長いところ、甘肅省の西北の端っこにあります。甘肅省はなんでこんな細長い形をしているのか。地図を見るとときには地形のことも頭に入れておかなければなりませんけれども、ここに、標高の高いチベット高原、青海高原があるわけですよ。そして青海高原の北から西にかけて縁取るようにして、祁連山脈<sup>きれんさん</sup>が走っています。この祁連山脈にずーっと沿う形で甘肅省が広がっているということです。この辺り一帯を「河西回廊<sup>かせいかいりょう</sup>」と言ったりします。「回廊」というのは、廊下という意味ですね。この祁連山脈の東側の麓に沿つて、割と平坦な地形が廊下状にずっと続いているんですね。「河西」というのは黄河の西、ここに黄河がぐるっと、大きく湾曲しているんですね。この黄河が南北に流れているところの西側一帯を河西地方と言つて、そこに廊下状の地形が広がっていることで、河西回廊と言えます。そこが甘肅省です。ですから、敦煌は河西回廊の西北の端っこにあるんですね。じゃあ、反対側

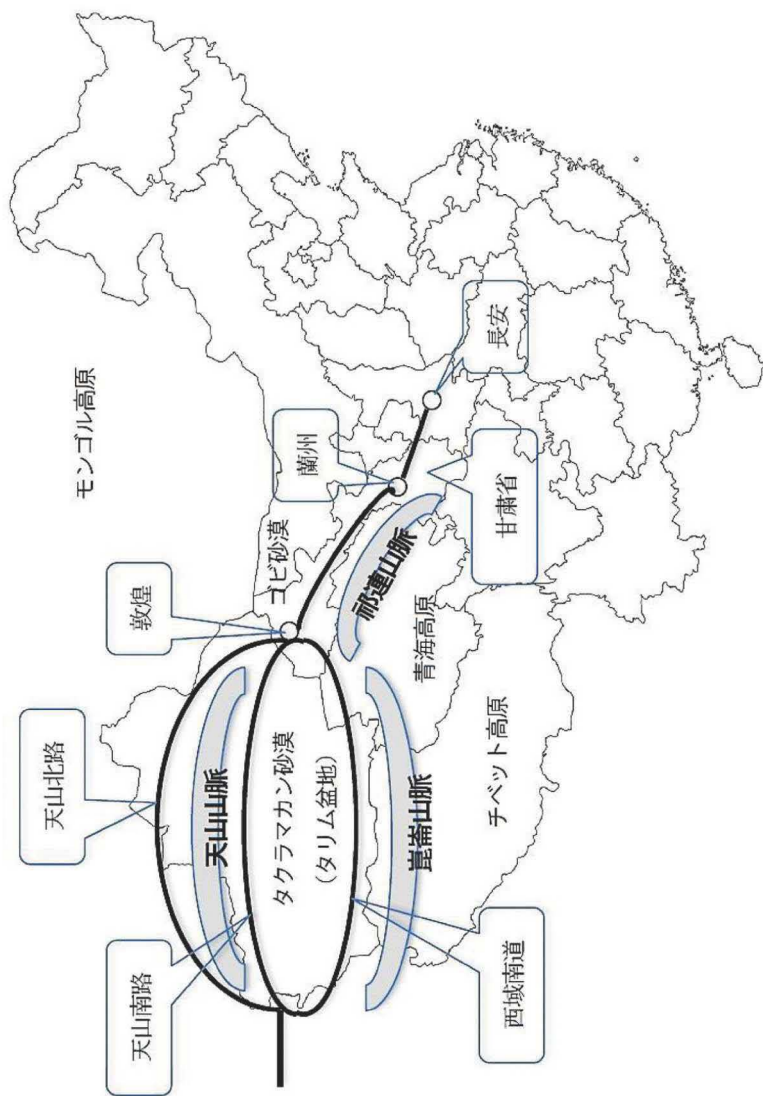


図1 Copyright©中国まるごと百科事典<http://www.allchinainfo.com/>  
を元に山口が加工

の東南側の終点には何があるかというと、甘肅省の省都・蘭州があつて、さらにその延長線上には今の地名で言うと、西安<sup>シヤン</sup>、つまり前漢の都、あるいは唐の都だった長安があります。ですから、厳密には敦煌と蘭州ですけれども、大まかには敦煌と長安を結ぶのが河西回廊だと、こういう言い方もできます。

そこで、今度は敦煌の西側を見てみたいと思います。ここにタリム盆地がありますが、その北側には天山山脈<sup>テンシャン</sup>という標高六千メートル級の山々が連なっている山脈があります。南側には崑崙山脈<sup>コンロン</sup>と、これまた標高六千メートルから七千メートル級の山々が連なっています。タリム盆地の中にはタクラマカン砂漠があり、そこから東に行つてモンゴル高原につながる辺りはゴビ砂漠ですね。そこに敦煌があります。

敦煌と言えば、「シルクロード」という言葉は当然セットで出てくるかと思ひます。シルクロード上の重要なオアシス都市、交通の要衝ですね。シルクロードという言葉は広い意味と狭い意味と二通り使い方があります。広い意味ではこの中国を中心とする東アジア世界と地中海世界を結ぶ交易ルート全般を指します。具体的には大きく三つあつて、北側の草原を通つていく「ステップルート」、真ん中の砂漠地帯を突つ切つていく「オアシスルート」、南側の海上を通つていく「海上ルート（南海ルート）」と三つあります。敦煌はこのオアシスルート上にあります。元々、「シルクロード」という言葉の語源となつたのがこのオアシスルートです。中央アジアの紀元前の遺跡から中国産の絹織物（漢錦）が点々と発見されて、それをつないだらこういうルートが出来上がると。ドイツの地理学者のリヒトホーフエンという人がもともと最初にこのシルクロードについて——ドイツの学者ですから、ドイツ語で最初は言っていた

んですけども、そういう言葉を使い始めたんで、このオアシスルートがシルクロードの語源なわけです。ただ、後になって、実際には北側のルートもあるし、海上ルートもあるじゃないかというので、今では全部ひっくるめて広い意味でシルクロードと言っているんですが、本日はそうじゃなくて、本来の語源となったオアシスルートに限定してシルクロードという言葉を使います。

シルクロード、オアシスルートには天山北路・天山南路・西域南道と、大雑把に言って三つのルートがあります。というのは、要するにこれは、この真ん中の盆地はほとんどが砂漠地帯で、人間が移動するためには絶対的に水が必要ですけども、じゃあその水はどこにあるかっていうと、この標高の高い山々に万年雪が積もっています。ここから、雪解け水が川となって流れてくるんです。その水を頼りに人々が住みついて、いわゆるオアシス都市を作っていくわけですね。そこを転々と拾うようにして、キャラバンは移動していく。そうすると、必然的にこういう三つのルートが出来上がったということですね。これが、大雑把なシルクロードの概略です。

そこで、敦煌という場所をもう一回見ますと、どのルートを通るにせよ、基本的にここで合流するんですね。絶対ここを通らなければ中国に入れないということではないんですけども、一番通りやすいルートとして、合流地点に敦煌という町があるので、そういう意味で敦煌は昔からシルクロードの中国側の玄関口と呼ばれてきたわけです。西のほうからやってきた商人たちは、基本的に敦煌を通って中国に入っていくという、逆に中国から西域に旅立つときにはほぼ必ず敦煌から出て行くという、そういう交通の要衝という土地柄から、交易の拠点として栄えてきた町だということです。



次に歴史の話をしたと思います。河西地方は、元々は漢民族は住んでいなくて、遊牧民の世界でした。秦の始皇帝が史上初めて、中国と呼ばれる地域を統一したわけですが、その頃はまた、河西地方は遊牧民の世界です。その後、始皇帝の統一からおおよそ百年後ですけれども、前漢の武帝が匈奴きょうしという、モンゴル系（もしくはトルコ系）の遊牧帝国を討伐したという出来事が紀元前一二九年から紀元前一一九年にかけてあったんです。これが転機となって、敦煌というか、河西地方一帯が中華王朝の版図に組み込まれるということになったんです。

具体的には、匈奴帝国はもともとモンゴル高原で勢力を張っていたんですが、一方、チベット高原のほうにもチベット系の羌きやうと呼ばれる民族がいて、前漢の前半期は、厄介なことに、この両者が手を結んで、連携して中国に侵略してくるということがあったんです。武帝はそれを断ち切るために、モンゴル高原とチベット高原の間にちよど横たわる河西回廊きせいかうらうに楔を打ち込みたいということで、おおよそ十年かけて匈奴を討伐したあかつきに、ここに四つの郡を置いたんです。東南から西北にむけて順に武威郡、張掖郡、酒泉郡、敦煌郡といいます。そこに強制的に兵士たちを送り込んで。こんな砂漠の中、誰も住みたくないですからね。自主的に住む人はいないんですが、強制的に移住させて、屯田なんかをさせて、自分たちで農耕させたということで、このときになって初めて、漢民族が河西地方に住み始めた、そういうことになります。「敦煌」という地名もこのときに初めて登場します。一説には、遊牧民の言葉で漢字に当てはめて、音写したというふうに言われています。

この時に「シルクロードが開通した」という言い方をよくするんですが、たまに誤解される方がおられ

まして、中華世界と地中海世界を結ぶこのシルクロード、これがこの時に一気に端から端まで開通したということではないんですね。「シルクロードが開通した」と言うと、どうしてもそういうイメージで捉えがちなんですけど、実際にはそうではなくて、タクラマカン砂漠の周囲にはオアシス都市が点々とありますが、これは紀元前のはるか昔からあったんですね。今回つながったのは、あくまでも河西回廊に沿って、敦煌郡、酒泉郡、張掖郡、武威郡の四つの郡を置いた、ここがつながったんだと。これが「シルクロードの開通」と、歴史の教科書に書いてあることの実態です。

ちなみに仏教といえば、インドで始まった宗教ですね。インドでも西北のガンジス川の流域で始まったんですが、これが中国に伝わって来るとき、平面的な地図で見えていたら、直線的に考えてしまいたくなりますが、実際はそうじゃないんですね。地形を考えないといけないと。ここには、世界の屋根と呼ばれる標高の高い山々がぎっしり詰まっていて、ここを突っ切るのはなかなか容易なことではないです。そうじゃなくて、一旦、北のほうに出てきて、中央アジアのシルクロードを通って、中国に入ってくる。と。仏教の伝来ルートとしてはこういう風になっているわけです。そうやって見てみますと、敦煌というのは、中華世界における仏教の先進地です。つまり、必ず、敦煌を経由したあとで中華世界の中心部、長安とか洛陽とかに行くわけですね。順序としては、どちらが先かというところ、まず敦煌にやって来られます。敦煌を経由しなければ、やって来ない。ごく一部、東南アジア方面からの接触もあるんですけども、それは例外であって、仏教のメインの交流としては、必ず敦煌を経由したあとで中華世界の中に入ってくると。そういう環境にあります。ですから、敦煌は、中華王朝の目線から見ると辺境の田舎の

都市ではあるのですが、その中華世界における仏教の展開を考える時には、少なくとも「中国仏教」が確立するまではむしろ先進地だという目で見なければならぬ、そういう特徴があるわけです。

敦煌の歴史の話に戻りましょう。仏教が伝わってきた敦煌では、三六六年から莫高窟はうこうくつと呼ばれる石窟寺院の開削が始まったと言われています。これが今、観光地として有名な世界遺産に登録されている敦煌莫高窟ですね。それから十四世紀に至るまで、開削され続けます。五胡十六国時代からモンゴルの元王朝にかけて、およそ一千年もの長きに亘って、ずっとこつこつと一つひとつ穴を掘り続けていったんです。今現在、七〇〇以上の石窟が確認されています。当然これは、人力で掘るわけで、ほんとに気の遠くなるような労力と資金とが必要だったんですが、そういうものをやっていたことです。世界的に見ても、これだけの規模の石窟寺院はなかなかちよつとないですね。この莫高窟こそが、いわゆる「敦煌文献」と呼ばれる一大写本群の発見地です。ちよつと細かい厳密な話をしますと、先ほどの「シルクロード」と同じで、「敦煌文献」という言葉が指す内容も広い意味と狭い意味とがあります。狭い意味で言うと、莫高窟の中の藏経洞と言われる一つの部屋から発見された物を指しますが、広い意味では莫高窟の他の石窟からも発見されていますし、あるいは莫高窟の周辺からも、ちよつとは発見されているので、そういうものも含めて敦煌文献と言ったりします。

話を本筋に戻して、敦煌の歴史の話です。敦煌は中華王朝の目線から見ると辺境の田舎です。ということは、敦煌の歴史は必ずしも中華王朝の興亡と軌を一にしているわけでもないですね。一応、前漢の武帝が敦煌郡を置いてからは、基本的には中華王朝の中で敦煌郡があるんですけれども。時代によつ



てはちよつとここから外れることがあるんです。具体的には、七八六年から八四八年、「吐蕃支配期」と呼ばれる時期に入ります。「吐蕃」というのは、チベット系の古代帝国です。この七八六年のちよつと前に何があったかと申しますと、有名な安史の乱です。唐王朝が滅びようかと――実際には滅びませんでしたけれども、もう滅びてもおかしくないぐらいの非常に大きな反乱です。その隙をついて、吐蕃帝国が河西地方を占領してしまつたんですね。この時に、敦煌はこの吐蕃の支配下に置かれることになります。およそ六〇年間、それが続きます。

そしてそれを覆したのが、敦煌土着の豪族であつた張議潮で、この吐蕃を追い出します。そうして、帰義軍期とよばれる時代に入ります。彼は「帰義軍節度使」という肩書きを唐王朝からもらいます。ちよつとややこしいんですが、唐王朝にかたちの上では帰順して、年号なんかも中華王朝のものを使っていますが、実際にはもう独立王国と言つていいような状況です。やがて敦煌では張氏から曹氏へと政權が移り、中国でも唐が滅びて五代を経て宋の時代になりますが、敦煌の為政者が「帰義軍節度使」という肩書きを中華王朝からもらうのはずっと一緒です。この帰義軍期は、八四八年から一〇三六年まで続きます。その後、西夏支配期、西夏というのはチベット系のタンгут族が建てた王国です。もともとはこのタンгутも唐王朝の支配下にあつたんですけれども、それが独立して西夏王国を建てます。これが帰義軍政權を滅ぼして、敦煌を支配する時期がおよそ二〇〇年近く続きます。そして西夏を征服したのがモンゴルです。モンゴル支配期というのがおよそ一五〇年続きます。このあと、明王朝は敦煌を放棄します。清の時にまた復活するんですが、もう田舎のさびれた町という程度のもんです。

先ほど言いました狭い意味での敦煌文献ですね、ある一室からまとまって発見されたと言いましたが、その部屋を「蔵経洞」と言います。敦煌文献の大半は仏典です。お経を収蔵していた洞窟という意味で、蔵経洞と言うんですが、この部屋は見つからないように壁が塗りこめられていたんですね。塗りこめた時期は十一世紀前半だと言われています。有名な井上靖の『敦煌』という小説は、西夏が攻めてくるときに、大事な仏典を保護するためにある一室に運び込んで壁を塗り込めたんだという、そういうお話です。ただ、これはフィクションであって、実際にはその説は、今はもうほぼ否定されているんです。とりあえず、少なくとも、この蔵経洞から発見された写本の中に西夏時代以降のものが無いのは事実です。西夏は、漢字を参考にして西夏文字という独自の文字を作るんですが、西夏文字の文献はここからは一つも発見されていないのは事実です。ですから、確かに西夏が支配する前におそらく壁は塗り込められたんだろうと、その蓋然性が高いというのは、その通りですね。その敦煌文献が、今からおよそ百年ちよつと前、一九〇〇年ちようど、もう清が滅びようとするときに発見されたんですね。

ということ、ここからは敦煌文献の概略をちよつと話したいと思います。敦煌文献が発見されたのは莫高窟という石窟寺院、これは現在の敦煌市の市街地から東南方面におよそ二五キロぐらい行ったところにある石窟寺院です。鳴沙山めいさざんという山があつて、その東側の麓、南北およそ一六〇〇メートル、むちやくちや長いです。七〇〇あまりの石窟が並んでいます。雲崗、龍門と並んで中国三大石窟の一つ。中国で最初に開削された石窟寺院と言われていますが、現在は世界遺産に指定されて観光地化されていると。ちよつと、写真をお見せしたいと思います。



図2 三危山を望む（撮影協力：馬場理恵子）

これは敦煌の市街地から莫高窟に向かう車の中から撮った写真です（図2）。砂漠地帯といっても、石ころばっかりの、こういう地形がずっと続いていく。ここに見えている三危山の手前に鳴沙山があつて、そこに莫高窟があるんです。今はもう観光地化していて、駐車場を降りて歩いていくと、結構、緑がたくさんあります。というのは当たり前で、本当の意味での砂漠、水が一滴もないようなところには人は住めませんからね。水のあるところだからこそ、人が住んで、こういう石窟寺院も作っているということになりますので、水も緑もそれなりにあります。

この山が鳴沙山という山です。こちら辺から莫高窟が始まるんですが、その中でも一番有名と言っていると思いますが、「九層楼」、別名、大仏殿とも言いますが、こういう立派な木造建築が前面にいつらえられているんですね（図3）。九階建てになっているので、九層楼という言い方をしますが、これが敦



図3 九層樓（撮影協力：馬場理恵子）

煌莫高窟のシンボリックな石窟になっています。石窟の内部はいろんな形状があつて、一概には言えないんですが、代表的な形としては部屋のご真ん中に柱がぽんとあるんですが、その柱に仏像が安置されているのが一般的なパターンですね。仏像は塑像で、いわゆる粘土細工です。他の、例えば龍門石窟だと塑像ではなくて、彫像、岩を直接彫って仏像をレリーフとして彫り出すのが普通ですが、この莫高窟は山の岩質がもろいので、そういうのがなかなか作りにくいということで、泥を固めた塑像を安置するのが一般的ですね。同時にまた、天井から壁から、一面に壁画も描かれています。この鳴沙山ですね、莫高窟の背後には、我々日本人が「砂漠」という言葉を聞いてイメージする鳥取砂丘のような、砂山のいわゆる「砂漠」が広がっています。今は観光客向けにラクダツアーなんてやっているんですね（図4）。こういうのを見ると、かつてのシルクロードを通っていた商人たち、キャラバンの姿を彷彿





図4 ラクダツアー（撮影協力：馬場理恵子）

とさせるような、そういう情景を今では観光客が作っているんですが。ラクダ乗り場に行って、おばちゃんに「ラクダに乗りたい」と言ってお金払ったら乗せてくれるというのですが。ところがこのおばちゃん、乾燥して喉が渴くので、ペットボトルの水とか飲むんですけれども、飲み終わったペットボトルを、その辺にぼいっと捨てるんです。「いいの、いいの。どうせ砂が隠してくれるから」って。ちよつと信じがたいような光景があつて、敦煌一帯の砂漠のことをゴビ砂漠と言いますけれども、今はそうじゃなくて、ゴミ砂漠ですよ。ちよつとこれは悲しむべきことです。

ということで、以上が莫高窟の概要ですが、これから敦煌文献が、今からおよそ百年ちよつと前、一九〇〇年五月に発見されました。発見したのは、道教のお坊さんの王円籙おうえんろくという人です。この当時、莫高窟は地元の人が若干、信仰の対象にしているぐらいで、もう石窟の一つ一つは誰も主がいらないような感じに



なっていたんですが、たまたま敦煌に流れ着いた王円籙がその一つに住みつこうとしたんですね。今は第十六窟という番号が振られています、当時はもちろん、そんな番号は振られていません。その部屋中に隠し部屋があつて、今は第十七窟という番号が振られています。これが、先ほど申しました通称「藏経洞」です。王円籙が、積もり積もった砂をかき出したりしているうちにたまたま通路の横壁が少しおかしいということに気づいて、壁を壊したら隠し部屋があつて、そこに大量の古写本が山積みされていたんです。これが敦煌文献の悲劇の始まりと言いますか、必ずしも悲劇という一言だけでは説明はできないんですけれども、この後、敦煌文献は世界中に散らばってしまうことになります。

この王円籙という人はそれから、地元のお役人なんかに賄賂としていくつか自分の発見した古写本を渡したりしていたんですね。そういう情報が伝わってきて、この当時、一九〇〇年前後は欧米帝国主義の全盛期ですよ。この中央アジアの砂漠地帯にも探検隊をどんどん派遣している時期です。その中で、フランスのペリオ、イギリスのスタインといった外国の探検隊が、敦煌で古い写本が発見されたらしいという噂を聞きつけてやってくるんです。王円籙のもとを訪ねて、二束三文のはした金で大量の古写本を買って、本国に送っていったんです。こうやって国外へどんどん流出していくと。ペリオは東洋諸言語を専門とする学者で、漢語を読んだり話したりできるんです。中国人の学者とも知り合いで、羅振玉（ろしんぎょく）という清朝の学者がいたんですね、ペリオは彼に自分が手に入れたものの一部を見せたんですね。羅振玉は「敦煌からこんなものが出たのか」とびっくりして、慌てて清朝政府に通報して、清朝政府はようやく残りを差し押さえて北京に全部まとめて移送するという措置をとったんですが、ところが王円籙

は隠し持っていたんですね。つまり、金づるです。その後も日本の大谷探検隊やロシアの探検隊なんか  
がやってきて、その都度、王円籙は小出しに売っては金儲けをしていたと。こうして、またどんどん外  
国に流出していく。さらに実は、北京に移送した清朝の担当役人にもまたろくでもないのがいて、横領  
するんですね。よさげな物を見繕って、自分の懐に入れてしまったんです。そうすると、運ぶ前と運ん  
だ後で数が合わなくなります。で、どうしたかという、残ったものを裁断してしまうんです。切って、  
数合わせだけしてつていう。横領と切断と、二重の意味で悪いことを彼らはしたんですが、結局その後、  
転売なんかしてどんどん分散していった、散逸してしまうと。これらの中にはまだに行方不明のもの  
もあります。

いずれにせよ、こうやって大量の敦煌文献を外国の探検隊がどんどん運び去っていったということで、  
中国ではこの敦煌文献は貴重な宝だと、国宝だと、それを外国が勝手に持って行くのはけしからん、返  
せと言っているんですが、ただ、学者というか、研究者としての立場から言うと、むしろこの時にイギ  
リスとかフランスが持ち去ってくれたからこそ、その部分に関してはちゃんと保存されているという側  
面もあるんですね。もし、この時に外国が手を出していなかったら、先ほど言いましたような移送担  
当の役人がどんどん抜き取るなどして、それが散逸して、現在、もつと多くのものが見れなかったかも  
知れないんですね。そう考えると、結果論ですけども、学術的な観点からは必ずしも悪いことではな  
かったと。悪いという側面だけで断じるのはちよつと無理があるということです。

そういうことで、敦煌文献は、いま現在、世界中に散らばっています。四大コレクションと呼ばれて

いるのが、イギリスの大英図書館。フランスのパリ国立図書館。中国の国家図書館。ロシアの科学アカデミー東洋写本研究所以外、これが四大コレクションです。その他にも中小コレクションが、例えば、中国では国家図書館以外の各地の博物館や美術館など、あるいは日本ですね、先ほど言った移送の担当の役人が横領した、それを転売したと言いましたが、その大部分が実は今、日本にあります。さらにドイツ、アメリカ、デンマーク、インド、フィンランド、韓国云々、世界中に散らばっているという事で、今はインターネットで写真が公開されたりもして便利になっていますけれども。数十年前までは敦煌文献を研究するというのは、なかなか難儀なことだったんですね。

敦煌文献の内容としては、九割以上は仏典です。他に官文書、民間文書、文学作品、医薬書、地理書などいろんなものが含まれております。言語で言うと、八割は漢語、他にチベット語、これは吐蕃支配期のもはチベット語で書かれています。他にウイグル語など、いろいろあります。書写年代は四世紀末から十一世紀初め、要するに莫高窟が開削され始めてから、西夏に支配される直前までですね。大半は八世紀から十世紀、唐の中期から吐蕃支配期を経て帰義軍期の末期にかけてのもので、中でも特に多いのは九〜十世紀の帰義軍期ですので、本日講演のテーマを「九〜十世紀」に限定したのは、そういうことなんです。

ということで、ここからは敦煌の地域社会について見ていきたいと思います。まず、「社」と呼ばれる民間の互助組織についてお話ししたいと思います。「社」というのは、社会の末端組織のことで、大きく言って、政府主導で組織される官社と民間で自主的に組織された互助組織としての私社とがあります。本日、

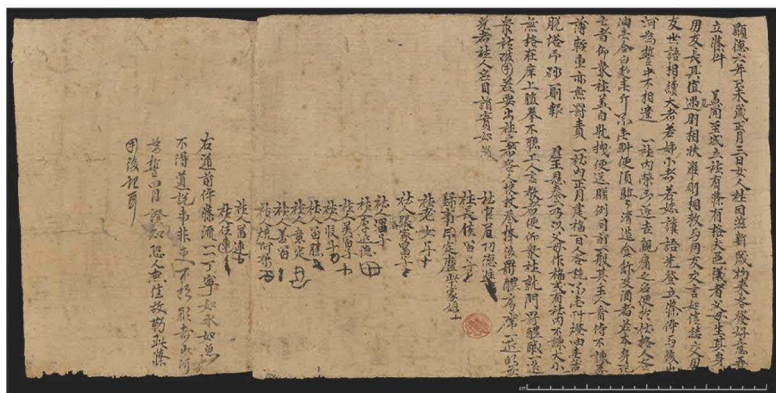


図5 女人社社条 ©British Library Board (OR.8210 /S.527)

お話するのは私社です。ちなみに「社」という言葉の本来の意味は土地神、「社」というのは「しめすへん」に「土」っていう字ですよ。『しめすへん』は、これは祭り、神様を祭るときにの祭りですね。「土」という字が組み合わさって、土地神を意味する言葉ですが、土地神を中心とする地縁集団がもとの「社」で、これは紀元前からあったと言われ、そこから発展して特に唐の時代の頃からだんだん、この私社っていうものが盛んに作られるようになったと言われています。

その社に関する文書が敦煌文献の中に豊富に残されているということですが、今日、お見せするのは女人社、婦人会ですね。その社条と呼ばれる写本をお見せしたいと思います(図5)。最初、「顕徳」という年号が書かれていますね。これは後周の年号です。五代十国のうち、五代最後の王朝です。先ほど申しましたように、これは敦煌では帰義軍時代ですね。その顕徳六年(959)、己未<sup>きぎのとし</sup>歳——これはいわゆる十干十二支で年を表すというやり方ですね。十干十二支で年を表すというのは、例えば身近なところで言いますと、阪神甲子園球場は甲子の年に



作ったから甲子園球場と言うんですね。甲子というのは、十干十二支の「甲子」という最初の組み合わせですけれども。そういう十干と十二支を組み合わせた言い方で、この年は己未の年にあたるということです。その正月の三日ですが、「女人社ではここに新年を迎えたことにより、各々の意志によつて社条をあらためて立てることとする」と。社条は条件という言い方もしますが、これが社の規則ですね。正月という節目に当たつてこれをもう一回あらためて立てるようにと。「思うに、社を結成するには、決まりごとというものがある。そもそも共同体というものは、父母は子を生み、友人はその志を育み、危険に遭遇したり困難に直面したときは互いに助け合うものである」と。要するに、社がなんでも必要かというとお互いに助け合うためでしょうつていう、社というものの存在意義をこうやつて説明するわけです。「友人と交際する際には言ったことは必ず守り、友情は永遠に続くものである。年長の者は姉とも思つて敬い、年少の者は妹とも思つてかわいがり、そうした義理を優先する」んだと。そうやつてこそ、共同体というのはうまいこと回つていくんだと。これは今の時代でも言えることですね。人間が集団を作つて、うまくやつていこうと思つたら、そういう最低限のルールはあるんだということですね。「条件（社条）を立ててからは、山河に誓つて終生決して決まりを破らない」と。皆さん、ちゃんと守りましょうと。

この後に、具体的な規則が書かれます。箇条書きということで、一という数字が書いてありますが、「一、社の構成員の家族に不幸があつた場合には、規定に基づいて各おの油を一合・白麵一斤・穀物一斗を持ちより……」ということで、この単位ですね。「合」というのは容積の単位でこの当時の一合はおよそ、六〇ミリリットルです。「斤」は重さの単位でおよそ五九七グラムですね。「斗」は、十合が一升、十



升が一斗ですから、一合の百倍ですね。六リットル、おおよそ、これが一斗です。あと、「白麵」というのは精白した小麦のことです。それに対して、これが今の我々日本人が見たときに、よく勘違いするものですが、これは「粟」という字ですよ。確かに粟というのは主要な穀物ですが、こういう時に出てくる「粟」という字は穀物の種類を指しているのではなくて、脱穀する前の穀物全般を指しています。これを粟と音読みで読みます。そういったものを持ち寄って来なさいと、この社の構成員、誰かがその身内に不幸があつたら、みんなでそれを持ち寄りましょうと。要するにお香典ですね。「もし構成員本人が亡くなった場合には、白布で遺体を覆つて皆で送つてやり、贈り物については前述の通りとする」というのは、お香典については変わりませんよと。変わるのは、布で遺体を覆つてやると。構成員本人がなくなつた場合には、布で遺体を覆つてやる。「喪主によるもてなしが丁重であろうとおざなりであろうと、罰則は無しとする」。喪主の負担に対する配慮をしているわけです。喪主は大変なんだから、おもてなしがいい加減であつても、別にそこは、とがめませんよということですね。これが一つ目の規則です。

二つ目、「二、社内で正月元旦を祝うときには、各おの穀物一斗……」、粟ですね。それから「灯油一皿・脱塔印砂を持ち寄ること」と書いてあります。「脱塔」というのは型抜きのお塔、要するに粘土細工で型抜きをするんですね。こういう携帯用の仏塔と仏像ですね。これを脱塔と、脱仏と言います。この文章には脱仏は書かれていませんけれども。「印砂」というのは「印砂仏」と呼ばれるもので、「印」はスタンプの意味です。「砂」っていうのは、要するに砂漠の砂というのは、もう無数にありますよね。こういうふうに砂漠の砂のようにいっぱい無数にぽんぽんとスタンプを押していくというので、それを印砂仏

と言います。これも要するに携帯用の仏像です。こういうものを紙にスタンプして持ち運ぶわけですね。「お正月の時は、皆さん、これを持ち寄りなさい」ということですね。続いて「一つには君主様の御恩に感謝し、二つには父母の幸福を祈る」と。そのためにみんなでお正月に集まるんだということですね。ここで、ちょっと写真を見ましようか。「君王」という文字があります。君主様のことです。その上に、空白がありますよね。これは、要するに君主に対する敬意をこうやって表しているんです。文字を詰めて書いたらいけないんです。場合によっては、ここで改行することもあるんですけどね。君主を表わす言葉の前は必ずスペースを空けて、尊敬の念をこうやって表すというやり方が昔の中国では一般的にあつたわけですね。

その続きをいきますと、「あるいは、葬儀や祝いの席上で勝手に喧嘩をしたり、年長者の言うことを聞かない者がいれば、その大小にかかわらず、罰として酒とご馳走の宴会を催させること」と、宴会を開かせるというペナルティがあるわけです。「もし社を脱退する場合には、各人杖打ち三回……」、結構、怖いですね。一旦入ったら簡単には抜け出られないって、なんかちょっと怖いものがあるんですが、逆に言うと、それだけみんな真剣に共同体として、お互い助け合いながらやっていくんだということですが、簡単には抜けられない。抜ける時には、杖打ち三回、そのあと、さらに「罰として酒とご馳走の宴会を催させること」というペナルティがあります。これが免除されることは絶対ないということです。

そのあとに、この社の構成員の名前が書かれてあります。ここで、名前を見ていきますと、肩書きが書いてあるんです。社長が社の指導者。社官がその補佐、幹事役ですね。録事というのが書記というの

で、これが三官と呼ばれる役員です。そのあとに「社老」がありますが、これはオブザーバーみたいなものです。そのあとに、「社人」という言葉があつて、これは一般の構成員ですね。名前がずらつと並んでいます。それぞれ、略押が名前のあとに書かれてあります。写真を見ていただくと、名前の下に、何か変な記号みたいなのが書かれていますよね。これが略押というもので、書判です。要するに判子代わりです。ただし、もうほとんど判子の意味を成していないんですけどね。要するに録事、書記係がこの文書を作るわけです。この構成員の名前も各自が書くんじゃないで、録事が一括して全部書くわけです。そして本人は自分の名前の下にこちよこちよとサインみたいなもので印をつけるのが、写真を見ればよく分かると思います。

その次です。「以上、ここに記した規定は一つ一つ、決定したものであり、魚と水との関係のごとく、是非を論ずべきものではなく、更に改めようとするものではない。山河に誓いを立て、日月もご照覧あれ。人々の信用がないことを恐れ……」というのはつまり、人々がこれを破ることを恐れ、ここに証拠として書き記して、後々のための証拠とするんだと。これは最後の決まり文句ですね。こういう文書を作るときには、必ず、こういう決まり文句で結ぶのが定型句となっています。

こういったものが、社条と呼ばれる文書で、そこから見えてくる社の役割というのは、節目の日には皆で集まつて宴会をする、親睦を深めるというのと、あと、これは絶対外せないのが、お葬式があつたら、みんなで助け合ひしよう。この当時の社の一番中心的な役割が、もうお葬式だと言っても過言ではないですね。死んだときにお互い助け合う。これが、大事です。共同体として、みんなで生きてい

くときに、決して生活は楽じゃないです。もうほんとに苦しい生活の中で、なんとかやっていくには、死んだときにみんなで助け合うっていう、これが実は大事なポイントなんです。こうやって人々はお互いに自主的に互助組織、社というものを作って、生活していったと。こういうつながりがあってこそ、この苦しい環境のなかでも、砂漠のなかでなんとか暮らしていくことができていたんだっていうので、この社の役割は、特にこの敦煌地方では重要視されていますね。

このほかにも社に関するものとして、社司しゃしや転帖てんてうというものがあって、回覧板です。要するに、この社というのは結局、今の日本であるところの町内会みたいなものですよね。私自身、昨年度はその町内会の班長をやっていたんですけども、何か通知があると回覧板を回すわけですよ。みんな判子を押して、次に回して行って、こんな、ほぼ同じものがあるんですよ、昔の中国でも。これはなかなか面白いですね。一千年の時を越えて、あるいは日本と中国、砂漠のなかであっても、人間のやることって、そんなたいして大きくは変わらないんだなと感じさせられる、そういうものですね。これが社というものです。

最後のお話、仏教信仰の一側面、仏教信仰と一口に言っても、いろんなカタチがあつて、到底一回の講演でお話できるものではないので、そのなかで一つ、今日は「仏名経」というものを取り上げて、簡単にお話したいと思います。敦煌に住んでいる庶民の多くは、いわゆる文盲、文字が読めません。そういうなかで、お坊さん達はなるべく教義を単純化して民衆を教化していく。とりあえず、どうやったら救われるか、たとえばどうやったら極楽浄土へ行けるか。もう単純にそこに特化するという側面がありま





図6 『賢劫千仏名經』(部分)  
© British Library Board (OR.8210 / S.253)

す。誤解のないように申しますと、そうじゃなくて、ちゃんと教義を教えてという部分もあります。あるんですが、それとはまた別に、こういう側面もあるわけです。そういう文脈で、実際に用いられていたものの一つとして、「仏名經」を取り上げたい、というわけなんです。

「仏名經」というのはその名前の通り、仏名を羅列しただけの、非常に単純な經典です。内容はほとんど何もありません。仏名だけなんです。これは千仏思想、仏と言ってもいろんな仏がいるという千仏思想と称名信仰、仏名を唱えるんですね、これが組み合わさったところに成立した經典と言われています。例えば、「<sup>ぶつみやう</sup>仏名会」というのは今の日本でも一部残っていますけれども、この仏名經を用いて、ひたすら

ずっと「何々仏、何々仏」って唱えていくと。そうすることによって、自分たちが現世で犯した罪が消えるようにと祈願するのですね。ここに仏名經の写真がありますけども(図6)、仏名の一つ一つに仏像が描かれていますね。これ、一つひとつちゃんと描いているみたいですけども。まさしくこれは先ほどの脱塔脱仏、あるいは印砂仏と同じで、もうこれそのものが信仰の対象になるわけです。これそのものを拝むわけです。仏名一つひとつ唱えるごとに、一つひとつ罪が消えて



いくつていう、そういう発想です。こういうものが敦煌からは結構たくさん発見されているんです。

この仏名経を巡って、ちょこっとだけ堅苦しい話になりますけれども、お聞きください。この仏名経の類の流布状況というのを見ていきますと、『大正新脩大藏經』というのは、これは日本で、大正から昭和の初めにかけて、一九二〇年代に編纂されたものです。大藏經というのは、別名、一切経とも言いますけども、あらゆる經典を集めたものですね。現在、仏典を見る時の一番のスタンダードが、この略していうと『大正蔵』です。この中には『十方千五百仏名経』『現在十方千五百仏名並雜仏同号』という仏名経も入っているのですが、実はこれ、敦煌写本から移録されたものです。というのはどうということかと、元々これは世に伝わっていなかったものなんです。敦煌写本の研究が始まったのが一九一〇年頃、そのおよそ十年後に『大正蔵』が編纂されるときに、待てよと。今まで知られていなかった仏典が敦煌写本の中にあるぞというので、そこから取り入れたのがいくつもあるんですね。この二つの仏名経もその中の一つなんです。で、隋唐時代に編纂された「経録」、つまり仏典の総目録を見ると、その当時から現在に至るまでの間に、相当数の仏名経が淘汰されてしまっていることが分かります。つまり、この二つの仏名経はまさしく、そうした「淘汰」されて消えていった仏名経なんですね。それが敦煌から発見された。また似たような例として、十六卷本の『仏説仏名経』というのがあります。これは同じ『仏説仏名経』でも十二卷本や三十卷本などがあるので、それぞれ区別するために「何巻本」というんですが、この十六巻本は長安では「疑偽経」、すなわち胡散臭い仏典だということで排除されていたんですね。経録にはそうしたことが書かれていて、実際、これは後世に伝わらなかった。ところが、その実物がたく

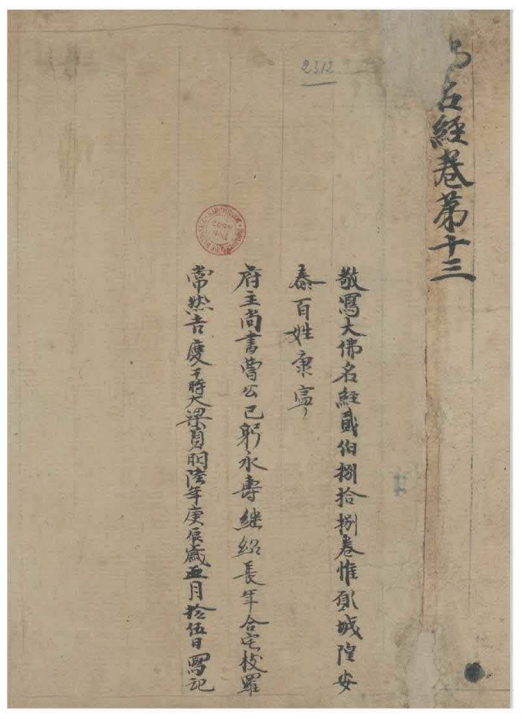


図7 十六巻本『仏説仏名經』(部分):  
パリ国立図書館所蔵 (Pelliot chinois 2312)

さん、敦煌から発見されているんです。しかもなんと、最近日本でも発見されています。名古屋のほうにある七寺というお寺で発見された十六巻本の仏説仏名經と、敦煌で発見された十六巻本の仏説仏名經の内容がほとんど一致するということが確認されています。

ということとは、どういうことが言えるのか。中国仏教というのは、中華王朝の保護のもとに確立されたものでありまして、両者の間には非常に密接な関係があります。そうした中で、仏教教団の「権威」が一生懸命確立されるんですね。でも、仏名經は、そうしたものの間にちよつと距離が感じられる。隋や唐王朝による宮廷写經というのは、実はわりと敦煌写本のなかにあるんですけど、その中に仏名經は確認できません。それに対して、敦煌の土着政権である帰義軍政権が行った大規模な写經事業として、仏名經の写本はあるんです。たとえば「Pelliot chinois 2312」、これはフランス所蔵のものです(図7)。この題記の

冒頭に、「敬みて大佛名經を貳佰捌拾捌卷寫す」とあります。大仏名經というのは実は、先ほど述べた十六卷本の『仏説仏名經』なんです。二八八巻つていうのは、十六巻のものを全部で十八セット、写経しますと言っているんです。この当時、敦煌には主なお寺が十八あったので、それに対応しているのでしょうね。そしてこの写経事業のスポンサーこそが、帰義軍政権の当主であった曹議金という人物、三行目頭の「府主尚書曹公」というのがそれです。年号は五代初めの後梁の貞明六年（920）。この題記を持つ仏名經の写本はもともと、全部で二八八巻あったわけですが、そのなかの十数点が現在まで残っているんです。長安では疑偽經として排除されていたものが、敦煌では政権肝煎りで大々的に写経されていたんですね。

こういうのを見ると、中華王朝を頂点とする漢字文化圏の広がりというもの、教団を頂点として民衆の信仰を底辺とする重層的な中国仏教の世界について、仏名經を手掛かりとして考えさせられるものがある、つまり、漢字文化圏で仏教を流布するために大事なものは何かというと、漢訳仏典です。もともと仏典というのは、サンスクリットで書かれたものですね。それを漢訳しなければ、漢字文化圏では通用しないと。この漢字文化圏の中心は中華王朝の中心。当時の都、長安ですね。そのこの仏教教団の中心にいる高僧にとって仏名經の類というのは、それほど重要ではない。むしろ一般の民衆に対する經典なんです、仏名經というのは。ですから、宮廷写経がないというのは、ある意味、当たり前と言えば当たり前のことです。逆に仏名經の需要が強かったのは、中国仏教における底辺たる民衆世界であると同時に、漢字文化圏における「辺境」であって、その意味からすると、先ほどの十六巻本『仏説仏名經』

ですね、中華王朝の中枢部では伝わらなかったものが、西の敦煌と東の日本で見つかったというのも決して偶然ではない。そういうふうに見えてくるわけですね。そうやって、教団からほど遠い一般庶民、中華王朝から遠く隔たった辺境の地においてこそ、仏名経はよく使われていたんだと。

それで敦煌にも仏名経がたくさん残っているんだというのですが、実際に仏名経をどういうふうに使っていたのか。一つは仏名の数を数えるんですね。「BD7650」という写本番号、これは中国の国家図書館に所蔵されているものですが、仏名を羅列している中に「五百」という書き込みがあります。これは、おそらく数えているんです。要するに、たくさん仏名を唱えれば唱えるほど、罪が消えるという考え方、思想があつて、仏名はたくさんあればあるほどいいんです。そうすると、数をかぞえるのが実は、一つ大事なことになるんだと。仏名経は、後の時代になるほど基本的に仏名の数が増加する傾向に

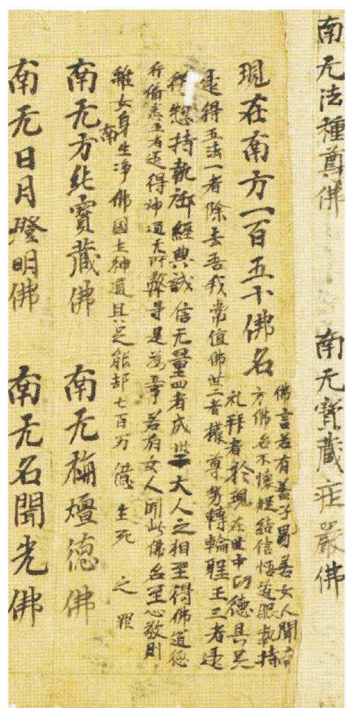


図8 『現在十方千五百仏名経』  
(部分)：武田科学振興財団・  
杏屋書屋所蔵(羽698V)

あるというのは、結局、たくさん数えれば数えるほど、それだけ罪が消えるという思想があるんだということです。

あるいは、経典を貼り継ぐ。「羽698V」というのは、大阪の武田科学振興財団の杏雨書屋に所蔵されているものですけれど



も(図8)、写真の一行目から二行目にかけて、紙の色が変わっていますよね。それだけじゃなくて、段がずれていますよね。しかも、これは字の特徴も違うんです。本来別の写本をこれは貼り合わせている。でも、内容はつながっています。つまり、当時、紙は貴重な資源ですね。しかも、一般庶民はなかなか自分では書写できないので、その辺にあるものをつなぎ合わせてなんとか用を足すと。間に合わせると。どうやらそういうことをしていたようですね。そういうのも見えてきます。

最後です。仏名のみを抜き書きするというのが、「敦煌研究院所蔵第六八号背面」ですが、これは先ほど言いました『現在十方千五百仏名並雜仏同号』という仏名経の中から、仏名だけを二つ抜粋したものです(図9)。経名もたいがい長つたらしいんですが、そこから抜き出した二つの仏名がまた、むしろくちや長いんですね。これは、一行目から四行目までが一つの仏名です。あと、五行目から七行目までが

1. 虚空妙无塵垢平等眼善樂德相光雜
2. 蓮花流離光寶像身香上世光一切庄
3. 嚴頂髻无量日月光滿願成就善花
4. 庄嚴法界超出无量衆王佛
5. □音熾然雜花光寶紅蓮花金
6. □明顯柔濡无礙眼十方放光一切
7. 世界遍滿相王佛

図9 『現在十方千五百仏名並雜仏  
同号』(習書) 敦煌研究院所蔵  
(敦研68V) [録文のみ]

また一つの仏名です。これは文章じゃなくて、それぞれが一つの仏様の名前なんです。仏名そのものが信仰の対象になっていて、そのためにこの仏名だけを抜き書きしたと。この写本の文字を見ていただきますと、決してきれいな字とは言いがたいですね。おそらく、文字を知らない人が文字の練習を兼ねて書いたものだと思うんですが、そうやって、仏



名だけをなんとか一生懸命真似して、見よう見まねで書いて、それ、そのものが信仰の行為になっていた。そうやって見ていきますと、この当時の文字を読めない一般庶民が、どういうふうに仏教を信仰していたのかと。あくまでも一つの側面ですが、そういうのが見てとれるということで、私のつたない話は、ほんとにとりとめのない話だったんですが、以上で終わりにしたいと思います。どうもありがとうございます。

## 「プロフィール」※二〇一六年度現在

大手前大学総合文化学部准教授

東洋史専攻（特に中国中世の制度史および、敦煌写本の研究）。京都大学文学部卒業、京都大学大学院文学研究科修士課程・博士課程修了「博士（文学）」。関西学院大学・京都女子大学・同志社女子大学等の非常勤講師を経て、二〇一五年四月より現職

《翻訳書》郝春文著、山口正晃訳『よみがえる古文書——敦煌遺書』（東方書店、2013）  
《論文》「敦煌学百年」（『唐代史研究』第十四号、2011）など